

# 長崎北病院 伝言板 5月号

令和8年5月1日発行

風薫る五月。五月晴れ。新緑や若葉の上を吹き渡る爽やかな風。語源は漢語の「薫風」。平安時代には梅花などの香りを運ぶ春早い時期の風の意味だったようですが江戸時代からは初夏の新緑の風になったとか。しかし、最近はさらに季節前倒し。5月にはすでに真夏日、脱水、熱中症。紫外線は強烈。風薫るや新緑という雰囲気ではなさそう。日焼け止め、日傘、帽子、水分摂取。すでに夏にご注意の気持ちで。



## “立てば芍薬、座れば牡丹”

5月、皐月。立夏(5月5日)、鯉のぼり、五月晴れ。さらに「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」や「目に青葉 山ほととぎす 初鯉」などに表現もあります。気持ちの良い季節です。

この季節、豪華に咲き誇る牡丹(ボタン)。花言葉は「王者の風格」「富貴」「高貴」など。百花の王と称され、その圧倒的な存在感と風格は格別。美人に例えられるのもわかります。それに対して、立てば芍薬の芍薬。地面からずっと伸びた茎に清楚な花が咲き、女性の立ち姿に例えられます。花言葉は「恥じらい」「はにかみ」「つつましさ」と牡丹より地味です。豪華な牡丹が目立つのですが、実はほとんどの牡丹は接木です。成長が早い「芍薬の根」を台木にして上に牡丹が接いであります。百花の王と言われる牡丹を芍薬が支えているのです。芍薬の力なしには牡丹は咲き誇れないのです。我が家の牡丹の一本が去年の猛暑で枯れて消滅してしまいました。ところが今年、その鉢から元気に葉が出てきて可憐なピンクの芍薬が咲きました。どっこい、台木の芍薬は生きていました。土の中で目立たずとも、健気にボタンを支える芍薬。丈夫で可憐。頑張っってねと愛着が湧きます。



牡丹

ついでに雑学。「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」は美人の形容。さらに、この3つの花、芍薬、牡丹、百合の形容は、漢方の薬効を示すとも言われているそうです。「立てば芍薬」はイライラとし気のたっている人を意味し、それに対しては芍薬が有効。「座れば牡丹」は座ってばかりで血流が悪い人、お腹に血が溜まっているような人を意味するのだそうです。その場合は牡丹の根の皮の部分(牡丹皮・ぼたんぴ)により改善される。「歩く姿は百合の花」は百合の花のようにナヨナヨとしている様子の中で自律神経の不調などを示すそうです。その場合には百合の球根が有効とのこと。私は漢方には全く詳しくありませんが「芍薬甘草湯」「大黄牡丹皮湯」「百合知母湯」などがあるようです。綺麗な花には「棘(トゲ)」があるとありますが、綺麗でさらに薬効もある、性格が良い。「そんな人に私はなりたい(宮沢賢治の『雨ニモマケズ』の結びの言葉です)。(ムリやろ) 百合の花



芍薬



百合の花

さて、新人が入職して1ヶ月。新しい環境と新人教育が続いてややお疲れ気味。これからは現場に出ていく時期。現場では白衣やユニフォームを着ていれば患者さんやご家族には新人の区別はつかない。教科書や講義で習ってはいても、知らない事、できない事、慌てるのがたくさん。これで良いのかな、自分はできない、向いてないのかな。戸惑ったり、落ち込んだり。自信はなかり。それが新人、それがいいのです。「私は大丈夫」「ちゃんとできる(つもり)」が一番怖い。根拠のない自信はミスにつながります。今はできなくて当たり前、できないことに気づく感性があるのです。同期で話す、先輩に聞く、自分で勉強する。一つずつ賢くなって一人前になっていく。知らないことを自覚することが成長の第一歩。落ち込むことはない。これから育っていく新芽です。芍薬のようにスッと立って、百合のようにたおやかに受け流し、牡丹のように大きく咲く。きっとそうなる。どんなに育つかは教育、環境次第でもある。先輩の方々には芍薬の根のように新人に栄養を送り続けてください。患者さん、ご家族には一人前になるまでしばしのご猶予と寛容のほどよろしくお願いいたします。(A.Sa.)

